

汲古一巻

「占卜と万葉の歌」

中村素堂

時間と紙幅が許せば、これは精しく書いてみたいことであるが、今は話を速く運ぶために、すぐに歌を結んで考えていたかどうかと思う。しかも社会的な行事となった正占系のものより個人的な悩みにあふれて人間の弱い反面が倚りかかっている雑占系の方が興味の深いものを感じるので、大体想像のつくものから例を拾ってみたいと思う。

ことだまの八十のちまたに夕占問う占まさに告る妹はあひよらむ (二五〇六)

恋人に逢いたく夕占(ゆうけ)に占ったもので、正占は多く朝に占い、重大事の時にはやむなく夕方にも占うので、夕・卜の二字を合して例外だということで、「外」という字が出来たのだから、夕占というのは正占の系統ではないが、これは一体どんなことによったものか、夕方の方の街に立つて人の話していく言葉から占ったものというし、またある一定の距離の路を歩いて、その歩数の奇・偶からではないかともいわれるし、そうすると路行占というのとどう違うのか、

玉ほこの路行占にうらなへば妹は逢はむと吾にのりつる (二五〇七)

夕占にも占にも吉くあるこよいだに來まさぬ君をいつとか待たむ (二六一三)

夜占問ふわが袖に置く白露を君に見せむと取れば消につつ (二六八六)

夕占にもこよひと告らわが夫はあせどもこよひよろ來まさぬ (三四六九)

大体似たような形式のものであるように見られるが多少違うだろうと思う。そして、夕占にも占にもとあつたりして、よく外の占いとともに行われていることも例歌が少なくない。ただこの二番目四番

目の歌にも見られる通り、今日と同じように当時もやはり占いはあまり当たることの方が少なかつたらしい、とほほ笑まれるのである。

二

雑占は人に打ち明けられない切ない思いに悩んで、その解決の途をひそかにひとり占ったものだけに、こまやかな人情に関するものばかりで、今日のように競馬の勝ち札や事業の成否を占うなどという物欲に関するものが全くないのも、この時代の時代相であろう。前述の夕占や路行占と似ていると思われるものに、足占というのがある。

春日山霞たなびきころぐく照れる月夜にひとりかもねむ (七三五)

という坂上大嬢が、恋人の大友家持に歎きを慰めているのに、家持もまた、行きたくて行きたくてつらい気持を慰めている。

月夜には門に出で立ち夕占問ひ足占をぞせし行かまくを欲り (七三六)

こんなやりとりがあつてこの恋愛に関する歌はめんめんと後に続いて載っているが、堪えられなくて、死ぬべき思えば、というようになむかしも今も同じ殺し文句が出てきて、家持は死ぬべきものを今日までも生けれ、またも逢わんと思っているからだ、と男の常套語で答えたりして、あげくには大嬢の妹まで出てきて、そんなにもたしていないで逢う手だてをしたらよいのに、と応援しているのだがさてこの足占とはどんなものであろうか。

これに関しては江戸時代に伴信友が正卜考の中でちよつとした解説があつたが、一定の距離を歩いて行きついた時に、右か左か止まつた方の足で決めるのではないかと思う。

やりそうな素朴な占いであるが、

月夜よみ門に出で立ち足占して往く時さへや妹に逢はざらむ (三〇〇六)

などという例もあるので、とにかく歩行から考え出したことは間違いないであろう。(つづく)

『筆間雜記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

〔たかむら〕昭和五十七年